

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

時局宣傳資料

資料
番號

甲
一
イ
D

昭和十三年九月十日
内閣情報部

人民戰線運動

部外秘

●注 意

- 一、本書は時局宣傳の參考資料として主管廳に於て起草し、内閣情報部に於て調整の上編纂したるものなり
- 二、本書の目的は關係廳に於て講演、座談會、新聞、雜誌、映畫等の指導及連絡上の參考たらしむるに在るを以て、之を死蔵することなく十分に活用し、汎ゆる機會に於て本内容の普及を圖るべきものとす、但本書の内容は此儘新聞雜誌等に掲載するが如きことなき様注意を要す
- 三、本書の利用に方りては、普及の對象に應じ適宜内容を取捨選擇するものとす
- 四、本書は情勢の變化に伴ひ、時々改訂せらるゝことあるを以て、改訂版を受領せば速に新資料と差換へ、舊資料は焼却するものとす
- 五、本書は職務上利用すべきものなるを以て、異動等の場合には後任者に引繼ぐべきものとす

目 次

- 一、人民戦線運動とはどんなものか……………一頁
- 二、人民戦線運動の國際的發展……………九
- 三、我國に於ける人民戦線運動とその檢舉……………一四
- 四、人民戦線運動に對する對策……………二四

人民戦線運動

内務省

一、人民戦線運動とはどんなものか

昭和十年夏露都モスクワで開かれたコミンテルン（国際共産黨）第七回世界大會は、種々なる意味に於て重要視すべき會合であつた。それはこの大會がコミンテルンの綱領に示す「萬國大會は二年に一回之を召集す」といふ規定にも拘らず、一九二八年（昭和三年）の第六回世界大會後七年目に開かれたといふことをであり、このことは直にコミンテルンの活動が一九三三年（昭和八年）以來の所謂後退時代より積極的活動に方向轉換の出發點であつたと云ふことを示すものである。之を我國の立場より重要視すべき點は我國が獨逸及びポーランドと共に此の大會で採用された反ファシズム及び反帝國主義闘争の主要目標國として指定されてゐること

とにある。又この大會によつて、コミンテルンが所謂世界革命運動の參謀本部たる地位よりソ聯邦擁護の一機關たるの本質を愈々露骨化するに至つたことも亦見逃すべからざる點である。

而して此の第七回大會に於ては、反ファシズム、反帝國主義闘争の爲に從來極力排撃して來た第二インターナショナル系の社會民主主義團體や、民主主義的、自由主義的な團體及分子と提携することを決議した。これは共產主義運動の戦術上に於ける劃期的な大轉換であつて、此の新戦術はコミンテルンの新しい指導者である元ブルガリヤ共産黨員ゲオルギー・デイミトロフに依つて提唱されたものだといはれてゐる。デイミトロフは、ナチスの政權獲得によつてドイツ共産黨が全く無力な敗北を喫したことの重大原因は、從來の社會民主主義團體に對する對立抗争の方針にあつたと自己批判し、今後は社會民主主義及び其の他の團體や分子と協力提携してファシズム反對のために廣汎なる人民戦線を結成し、之を通じ

て共產主義勢力の擴大を圖るべきことを力説したのであつた。我が國を反ファシズム闘争の主要目標國と指定したことは、滿洲事變を契機とする我國の大陸への躍進的な進出と、日ソ間の國際關係の緊迫化、之と期を同じくして我國共産主義運動の極度の衰退等の諸情勢に刺戟せられた結果であり、自國擁護と日本共産黨の再建てふ一石二鳥の老獪なる意圖に基くものであるといふことは容易に首肯せらるゝところである。又これは恰も國內の社會主義建設の第一期を終へ、國際的には日、獨等に對して積極的に抗争の態勢を整へるべく、昭和九年國際聯盟に正式加入を決定したソヴェト聯邦の對外策と合致したものであつて、こゝに共產主義運動の新戦術としてファシズム反對のための人民戦線運動が採用されるに至つたのである。

かくてコミンテルン第七回世界大會に於ては、從來其の支部たる各國共産黨をして直接且積極的に共產主義革命の不穩矯激なる宣傳煽動と活動とを展開せしめ

つつあつたのを改め、高遠なる理想よりも先づ日常切實なる要求をスロロガンとして労働大衆を獲得すべく大要次のやうな方針を決定した。

四

一、反ファツシズム及び反帝國主義闘争を當面の主要活動と爲すこと、

二、社會民主主義其の他大衆團體との統一戦線を樹立すること、(人民戦線運動)

一、劃一的國際主義を排し、各國の國情に即したる戰略戰術を採ること、

一、之等の諸活動展開上極力合法場面を利用すること、

これは前述の如く共產主義運動の戰略戰術の大轉換である。即ち戰略の主要目標を、共產主義革命の方向への直線的且獨立的な闘争の代りに、反帝國主義及反ファツシズム闘争の二點に置き、而もその爲には從來極力排撃して來た社會民主主義其の他の大衆團體との間にファツシズム反對の爲の統一戦線を形成することとし、更にこのやうな戰略戰術の目標に向つて爲さるべき具體的闘争方法即ち具體

的戰術の變更をも決定したのである。それは從來の所謂セクト主義を捨て、政見を異にする種々雑多な異分子ともファツシヨ反對の爲には握手し、之を同一戦線に合流せしめて協同行動に進出すべきこと、その爲には各國の特殊事情を特に留意し右翼團體内部にも潜入すべきこと、合法場面を利用すること、又煽動宣傳等の如き運動の實際に當つても從來のやうに高踏的、抽象的、觀念的なスロロガンを掲げて公式主義的杓子定規的行ふことをやめ具體的、現實的な而も弾力性屈伸性ある運動方法を採用すること等を規定したものである。

併しながらこのやうなコミンテルンの新方針に基く人民戦線運動は、共產主義運動からの轉身又は退却ではなく、實際は却つて運動が積極化し巧妙化したものに他ならない。反ファツシヨ運動はやがて共產主義革命の一手段であり、この反ファツシヨ運動はやがて共產主義革命の方向に大衆を誘導すべく意圖されたものに他ならない。即ち人民戦線運動は、共產主義運動の新しい扮装形態である。

人民戦線運動

五

六
のことは第七回大會に於て述べられた次の如き言葉によつても知ることが出来る。『勤勞者の日常要求を中心とする最も初歩的な抗議運動より始めて、屈伸性ある戦術を以て共産主義者は一層廣汎なる大衆、特に意識せずしてファツシズムに追隨する勞働者を運動に誘引せざるべからず。共産主義運動の新しい扮装形態としての人民戦線運動が、従來の運動方法よりも一層積極的であり警戒せらるべきものである理由は、之によつて一般大衆が其の眞意圖を意識せずして動員利用され、人民戦線派の活動を助勢する結果を招來し、又は之に合流し居るかの如き外観を呈することであり、徐々に大衆が人民戦線派に獲得され其の勢力が擴大されるに至ることである。その闘争目標として掲ぐるものも従來の如き『資本主義の打倒』『プロレタリア獨裁の樹立』といふが如き基本的且尖鋭的なものではなく、平和擁護の闘争乃至ファツシヨ反對の闘争である爲、表面高唱するスロウガンのみならず、その非合法性を察知し得られなくなつたこと等である。それのみならず、むしろ日常生活起する種々なる政治、經濟、社會の具體的諸問題について大衆の要求せんとするところを逸早く採りあげ、之をスロウガンとして運動を展開するので、大衆はその裏面に潜む眞意圖を察知すべくもなく、共産黨の戦略戦術なることを認識せずして之に賛同し誘導せらるる處が多分に存するのである。既往に於ては、あまりにも矯激にして高度なる政策を掲げた爲、却つて一般大衆より敬遠警戒され共産黨は大衆より遊離するに至つたのであるが、所謂新戦術に於ては努めて一般大衆の日常の切實なる要望に副つて活動を展開し大衆のファツシヨへの移行を防止し之を粉碎し漸次左翼に引き込まうとしてゐる。従つて運動は原則として合法舞臺に於て行ふこととし、合法運動を利用し或は擬裝することに努めらる。この合法運動の利用乃至擬裝こそ大衆にとつて最も恐るべき戦術であつて、大衆は合法運動に氣を許し警戒心の薄らいである處に乗ぜられ不知不識の間に利用され獲得される處があるのである。

また運動方法は、既往の如くコミンテルンよりのテーゼを基本として、各國共產黨が一律的に其の下部組織に指令して運動を爲すやうな機械的方法を執らず、その國々の特殊事情を參酌し、具體的諸情勢に即應するやうな方法を探ることになつたので、一見其の非合法性が判らなくなつた。また具體的闘争項目も各地方地方の實情に應じて適當な問題を取り上げるやうになつたので、從來の様に黨の規定し指令する運動をその儘無條件に土地の事情如何に拘らず劃一的に強行せしめられたのに比較し、この戦術は極めて效果的である。従つてまた黨活動であることの發見も容易でなくなつたのである。

この故に茲に最も戒心を要することは、左翼的意圖に基かない單なるフアツシヨ反對の意嚮も、人民戦線派的勢力の構築に利用されることとなり、人民戦線活動にとつては好個の温床であるといふことである。民主主義、自由主義等の思想を抱持する者及び此等の影響下にある者は今日相當多數であるが、之等の人達の

不用意に唱へるフアツシヨ反對は、人民戦線派の主張と客觀的には一致するので、共產主義者は此等の叫びを極力利用して自己の運力展開の地盤に供するのである。今試みに人民戦線的のスローガツを見ると人権擁護、軍部官僚獨善反對、大衆課税反對、物價騰貴反對、大衆生活の安定等合法且大衆向きのもののみであつて、大衆は餘程注意警戒をしないと巧みに誘引獲得される危険性があるのである。

二、人民戦線運動の國際的發展

この様な人民戦線運動の萌芽は、コミンテルン第七回世界大會に於て正式に決定される前、既に昭和九年七月頃フランスに於て發生し、翌年には急進社會黨より共產黨に至るフアツシヨ反對の諸團體が協同提携してフアツシズム及び戦争反對の人民戦線を結成し、その翌年六月にはブルジョア人民戦線内閣が組織されたので

ある。次にこの人民戦線運動は、フランスに隣接するスペインに於ても大なる勢力を扶植した。昭和六年に共和革命を遂げた後の紛糾せるスペインの政情は、共產主義勢力の進展の好個の温床となつて居たが、人民戦線運動がフランスに於て盛となると共にスペインに於てもそれは進展し、昭和十一年二月には遂に人民戦線内閣が成立するに至つた。然るに人民戦線政府反対派は同年七月人民戦線政府に反抗して起ち、こゝにスペインはソ聯邦及びフランス兩國によつて支援される人民戦線政府軍と、ドイツ及びイタリーの兩國によつて支援される國民軍とは對立し、深刻なる内亂となり、今に至るもその終熄を見ない状態である。而して此の内亂はヨーロッパ諸國の思想的抗争にまで發展し、國內同胞の血で血を洗ふ相撃の慘禍は、この上ない悲惨事として世界人類に強い衝動を與へた。

更に人民戦線運動が進展したのは隣國支那である。人民戦線運動の戦術によつて従來の支那赤化は急激に擴大された。

コミンテルンは第七回世界大會に於て中國の當面の主要なる敵を日本なりと決定し、日本に對抗する爲には中國共產黨及び共産軍を援助すべきことを決議してゐるが、其の後中國共產黨及び共産軍に對して更に日本帝國主義反對の民族革命闘争のスローガンの下に運動を行ふべく指令したのである。中國共產黨は之のコミンテルンの政治方針に基き「抗日救國」をスローガンを爲し、昭和十年八月一日附を以て抗日人民戦線運動展開の具體的方法に關し、所謂八・一宣言と呼ばれる「抗日救國の爲同胞に告ぐるの書」なる布告を全中國民衆に對して發した。爾來抗日の風潮と内戦反對の要求は漸次熾烈を加へ、昭和十一年十二月の西安事件を契機として南京政府は遂に所謂國共再合作に應ずるの餘儀なきに至つた。

こゝに特に注意すべきは、抗日人民戦線運動が植民地乃至半植民地に於ける一般的革命戦術としての單なる反帝國主義運動ではなくして所謂日本帝國主義のみ

を闘争目標とし、日本帝國主義打倒の爲には獨り國民黨やその他の國內諸勢力のみならず、歐米帝國主義をも之が爲に利用せんとする點にある。既往に於ける中國共產黨の反帝運動は獨り日本帝國主義のみならず英米其他の帝國主義をも闘争目標として來たことは周知の如くであるが、コミンテルンの所謂新戦術は日本以外の帝國主義に對する反帝闘争は之を中止するばかりか、抗日の爲には之と妥協し之を利用せんとさへするのであつて此處に反帝運動の特殊形態として抗日單一人民戦線が展開さるゝに至つた。偶々支那事變が發生するやコミンテルンは好機到れりとなし、中國共產黨を指導して中國國民大衆に長期抗戰、抗日戦線の擴大を煽動し、また南京政府、中國要人等を強要して抗日全面戦遂行の已むなきに至らしめたのである。

中國共產黨が何故に自ら進んで國民黨の統制下に趨いたかに就ては、その眞意圖を察すれば眞に恐るべきものがあるのである。中國共產黨は既に西安事件に於

て蔣介石の共產黨討伐の意圖を逆に容共政策に變更することを餘儀なくさせ、また抗日即時開戦を提唱して抗日人民戦線の結成を促進し、遂に今次事變の因を爲し我が方の事件不擴大、局地解決の方針を蹂躪して戦禍を今日の狀態迄擴大せしめた。この巧妙なる戦術を思ふとき、斯る手を自ら打つて出で國共の再合流に功を收め、徐々に巧妙なる手段によりその指導權を掌握し、遂には思ふ壺に導き入れんとする魂膽であることが明らかに察知し得られるのである。而も其の背後にはコミンテルンが之を操り、我國に對し國共合體、舉國一致の長期抗戰を爲さしめ、以て我が國力を消耗せしめて對ソ關係を牽制せんと企圖しつゝあることは想像に難くないのである。

かくの如くコミンテルンの支那赤化を通じての我國に對する策謀の脅威を見れば、人民戦線運動の國際的魔力、殊に我國に及ぼすその國際的攻撃の脅威は實に甚大であると云はねばならない。

三、我國に於ける人民戦線運動とその檢舉

前述の如く人民戦線運動は最近に於ける共産主義運動の扮装形態である。共産主義運動が我が國に於て如何に執拗に根強く跋扈したかを回顧すれば、人民戦線運動の形によつて共産主義運動が再び擡頭するに至つたことは決して不思議ではない。

嘗て跳梁を逞うした日本共産黨は、數次の大檢舉に依つて致命的打撃を受け、加ふるに滿洲事變以後に於ける日本主義的革新思想の勃興と、黨の指導者佐野學、鍋山貞親を初めとして多數の有力なる共産主義者の轉向を出すに及び、若手の地下的蠢動は續けられたが、大體に於て再起不可能なるかの感があつたのである。然るに前述の如きコミンテルンの新方針が昭和十年七月十七日附東京日々新聞紙上に「コミンテルンの萬國大會、新國際情勢に呼掛く」と題して第七回大會の開會を報

じたるを最初として、本大會記事は相踵て新聞其の他の合法出版物に掲載され、週刊「時局新聞」「社會運動通信」等の如きは、「全世界環視裡にコミンテルン大會閉づ、平和のための闘争を標語」(時局新聞昭和十年九月十六日第一二三號)「反ファッシヨ戦線統一に第二インテラーと提携」(社會運動通信昭和十年九月二日附)「第七回國際共産黨大會の演説及決議(一)——(六)」(社會運動通信昭和十年十月八日附)「十月十五日附」等と共に内容を詳細に報道する所があつた。特に重大なる刺戟を與へたのはアメリカ共産黨日本人部發行の邦字印刷物の國內流入であつた。該印刷物は、新方針に基いて最近に於ける我國の政治、經濟の動向を總て「ファッシズムの擡頭」「支配階級の戦争政策」の結果であると歪曲宣傳し、之に對しては「自由民権の擁護」「平和政策の樹立」「國民生活の安定」等のスローガンを掲げて闘争すべきこと、及び之が闘争の爲には社會大衆黨を中心として既成政黨内の進歩的分子とも提携し、廣汎なる反ファッシヨ人民戦線を樹立して闘争すべきこと等を指令し來つた。

之等が起死回生の刺戟となつて、我國に於ける共產主義運動は再び擡頭發展の勢を示すに至つた。殊に注目を要するのは、從來共產黨の正統派に比し穩和なる態度を採り檢舉を免れて來た左翼分子が、コミンテルンの反ファツシヨ人民戦線の新方針に力を得て反ファツシヨ戦争反對の闘争を活潑に展開するに至つたと、之である。

もともと日本共產黨系統の極左分子間にも、昭和九年末頃より「過去のセクト的高踏的な運動方針は、唯犠牲のみ多くして効果なきを以て、將來は出來得る限り合法運動を擬裝し、或は利用せざるべからず」との機運が醸成されつつあつたので、此等の分子も亦コミンテルンの新方針に依り、自らの抱懷する合法利用の運動方針の正當性が承認せられたりとして、俄然其の活動が活潑化し來つたのであつた。茲に於て取締當局は銳意此等左翼分子の活動を極力阻止すると共に、其の組織につき内偵を進めた所謂正統派の方面に於ては、人民戦線の推進力として關西

を中心に日本共產黨再建準備委員會、東京に於ては日本労働組合全國協議會の再建委員會が結成せられて非合法活動が展開せられつゝある一面、東京に本部を置き十六府縣に支部を有する新興佛教青年同盟が佛教宗派の統一、既成教團の革新てふ名の下に、反ファツシヨ人民戦線運動と關聯して共產黨と同一目的の實現貫徹の爲活動を展開しつつあつた。其の他各地には共產主義祕密グループが結成せられ、合法労働組合を擬裝若くは利用して日本共產黨の再建若くは其の組織の素地を作る爲の活動が展開されてゐることが判明したので、昭和十一年十二月五日以降之が檢舉に著手したのであつた。

一方日本無産黨、日本労働組合全國評議會及び之が理論的指導に當つて來た所謂勞農派分子に於ては、所謂(單一協同戦線黨)の理論に基いて労働組合其の他を統合し、反ファツシヨ人民戦線の統一強化の爲活動しつつある事實が判明するに至つたので、昭和十二年十二月十五日關係分子の一齊檢舉を行ひ、同二十二日日本無

産黨及び日本労働組合全国評議會に對して結社禁止を命ずるに至つたのである。而してこの事件は、被檢舉者が何れも表面合法的な運動方法を執り、所謂合法場面にあつたこと、更に被檢舉者中に新聞雜誌等論壇の一角に勢力を張つてゐた者が多數あつたこと等の特色を持つ爲に、社會一般に相當甚大なる衝動を與へた。今特にこの一派の所謂人民戦線の運動概況及び檢舉理由を摘記すれば次の通りである。所謂勞農派とは我國最初の産黨組織者たる山川均、荒畑勝三、高津正道等を中心として雑誌「勞農」に據つてゐた一派であつて後に鈴木茂三郎、加藤勘十、大森義太郎、黒田壽男及向坂逸郎其の他の指導分子が加はつたのであつて、元來之等は日本共産黨内の一派であつたのである。勞農派の思想は所謂第一次日本共産黨當時の首腦分子たる前記山川、荒畑等が從來の極左的地下潜行的の運動に對し、今後は單一無産政黨の運動を起し之との共同戦線によつて大衆を啓蒙獲得し、其の基礎を廣汎なる大衆に置かねばならぬとの主張を爲したことに端を發す

と稱せられてゐるが、其の後若手黨員である福本一夫、佐野文夫及市川正一等の一派がこの運動方針を日和見主義又は追隨主義であると反對し、飽く迄職業的革命家の結束を以て地下潜行的の産黨を結成し、之を擴大強化して其の目的を達すべしと主張するに至つたので、こゝに日本共産黨は山川派、福本派の兩派に分れて互に論争し、遂にコミンテルンの裁斷を仰いだのである。之に對しコミンテルンは兩者とも極端なりとして折衷案を以て裁斷したのであるが、兩派の争ひは依然として繼續し、福本派は自ら自派を以て日本共産黨の正統派と任じ、一方山川派は之を勞農派と呼稱するに至つた。而して福本派は青年分子を多數抱擁して活動的であつた爲、遂に日本共産黨の實權を掌握し山川派を黨より除名した。爲に爾來我國の共産主義運動上には正統派と、勞農派の兩派相對立して抗争を續けて來たのであつて、右の經過並其の後の運動に徴するも、兩者の差異は單に運動の方法論にあつて決して主義思想の相違ではなかつたのである。

二〇

「勞農一派は日本共産黨と疎隔後機關紙的雜誌『勞農』を發行し、或は其の他の雜誌を通じて引續き正統派との論争に努めたのであるが、これ亦戰略戰術に關する問題であつて、主義思想の相違に關する論争ではなかつた。又從來此の派の無産政黨並に勞働團體が合法團體の形態を採つて來たのは戰術上の意圖に基くものであつて、その眞意はマルクス、レーニン主義の基礎に立脚して居たものであることは、之等團體の發行配付せる文書によつても推測されるのである。かくの如く勞農派は日本共産黨より出生せる一派であつて、其の運動目的は日本共産黨と同じく共産主義革命を目的とするものであるが、唯日本共産黨と疎隔以來はコミンテルンとの有機的連絡關係が明瞭でなく、其の運動方法が表面合法的であり正統派に比し一見穩健に見へたので、從來は主としてコミンテルンの日本支部であり不穩矯激なる鬭争をその信條とする日本共産黨に對してのみ檢舉取締が集中されたのである。

然るにコミンテルンが、前記の如く人民戰線でふ恰も勞農派の戰術に近似せる方針を探るに及び、之に勢ひを得て其の活動は頓に活潑化し來つた。即ち當時勞農一派の分子を中心にカンパニヤ組織として結成されてゐた勞農無産協議會は、昭和十一年五月頃から社會大衆黨に合同して反ファツシヨ統一戰線の樹立を計らんとする意圖の下に策動を開始したが、社會大衆黨が容易に之を肯ぜざるの状況を看取するや、昭和十一年七月三日遂に「反ファツシヨ人民戰線の推進力となる」目的を明らかにして、新に其の儘の名稱を以て勞農無産協議會を再組織し（昭和十二年四月之を日本無産黨と改稱）、人民戰線なるスローガンの魅力と壓力を以て社會大衆黨と合同を實現すべく種々畫策し、同年九月三日正式に其の合同を提議したのであつた。然るに社會大衆黨が之を拒絶するや、爾來同黨幹部のファツシヨを攻撃し、我國に於て最も忠實に反ファツシヨ鬭争を爲すものは勞農無産協議會なることを強調し、以てコミンテルンの新方針實踐に忠實なる態度を示したので

あつた。又昨年七月支那事變の勃發するや、日本無産黨(勞農無産協議會の改稱)はアメリカ共産黨日本人部が其の發行する宣傳煽動印刷物に於て、我國の左翼分子に對し指示せると同様なスローガン即ち平和外交の樹立、出征兵士の遺家族救援、出征兵士の解雇反對及び賃銀全額支給の運動、出征農民家族の小作料減免、出征兵士のある家族の借金支拂延期及税金免除、戦争のための物價騰貴等の問題を取り上げて運動を爲すに至つたのであつて、又その中心運動目標である反ファツシヨ人民戦線の樹立は、コミンテルンの新方針同様全く共產主義革命へ大衆を動員するの手段方法であつた。尙實際活動に於ても、支那事變發生以來我國の重大時局に際し帝國の方針を支持し之に協力せざるのみならず、却つて前述の如くコミンテルンの指示する方針と同様の方法を以て反戦思想の流布宣傳に努め、更に事變終局前後に於て政治、經濟、社會の各問題が惹起することあるべきを豫想して、その際之等の問題を捉へて積極的に人民戦線運動を展開すべく虎視眈々と

て待機の状態にあつた。又日本労働組合全國評議會は、前述の日本無産黨を支持するのみならず、その幹部の悉くが日本無産黨の幹部であり、而も此の組合は従來我國の革命的労働組合の傳統を繼承し、其の實際活動に於ても全く日本無産黨のそれに從屬し、所謂階級的労働組合を統一強化して反ファツシヨ人民戦線の確立に努めつたのである。而して勞農派が年來主張する所の協同戦線黨戦術とコミンテルンの提唱指示する反ファツシヨ人民戦線のそれが極めて近似する所より日本無産黨、日本労働組合全國評議會等を指導して俄然活潑なる活動を展開するに至つたことは前述の如くであつて、一派の中心分子が「人民戦線運動はプロレタリア獨裁を抛棄したものである。プロレタリア獨裁を實現して行く上に人民戦線といふ形態を採るべきである。」(日本評論昭和十二年九月號)「人民戦線が國民戦線か」と題する誌生座談會(矢森義太郎)といつてゐるのは、勞農派の人民戦線運動

の本質を明かしたものであり、又「人民戦線の真隨はファツシヨ反對勢力に全國民の九割を動員する點にあり、それは平和と自由と米をもたらし爲てであり、又勞農革命の準備である」、フックスン打倒の國民運動はブルジョア民主主義に通ずるといふことである。換言すれば日本の人民戦線運動は民主主義革命運動の性質を持つといふことである。昭和十二年十二月二十日附國民の友第七號「現下の人民戦線について」といふ米國共產黨日本人部の日本共產主義への指令的記事と表裏相通じ、所謂勞農一派が人民戦線を以て勞農革命の準備であり、其の運動はプロレタリア革命に通ずるものなりとの意圖の下に、人民戦線運動を展開しつつあつたことを證明するに充分である。

四、人民戦線運動に對する對策

以上所謂正統派の人民戦線の形態による再建運動、勞農派並日本無産黨、日本

労働組合全國評議會一派による人民戦線運動は昭和十一年十二月五日、同十二年十二月十五日の兩度に至る検査によつて一應之を剷滅したためであるが、共產主義運動は其の性質上極めて執拗であつて、之が根絶は容易の業に非ざるのみならず、我國現下内外の諸情勢は、人民戦線的な形態による共產主義運動の再擡頭に相當有利なる情勢を醸成しつつあるやに認めらるゝのである。

思ふに斯の如き人民戦線の形態による共產主義運動に對抗するの方途は三つが考へられる。一は國體明徴の徹底、國體觀念の宣揚であり、今一つは防共協定の強化擴充、國內防共の實踐である。人民戦線運動は國民の思想的脆弱性に突入して来る。されば之が對策としては、先づ國民の思想を健全鞏固ならしむる事が唯一無二の根本的措置である。國民思想が確乎たる信念の下に何等の動搖なく統一され、健全に維持昂揚されてゐる限り、如何なる悪思想も襲撃の餘地は存しないのみならず、却つて逆に跳ね返してしまふのである。

人民戦線運動



我國は明治維新以來急激に西洋思想を輸入したが、之は一方に於て我國文化の進歩向上に貢獻すると共に、他方に於ては我國本來の國民精神までも萎縮せしめ、腐蝕せしめんとする悪影響をも與へたのである。西歐の思想を輸入するに急にして、我が國情に副ひ難きものをも醇化なし得ずして之を攝取した。その結果個人的唯物的世界觀や人世觀に基く風潮が滔々として世を風靡し、我國本來の思想即ち肇國以來の光輝ある日本精神の顯現に及ぼしたる悪影響は甚だしいものがある。延いてその見えざる害毒、被害は思想文化その他の各方面に互り今日に至つて大を爲してゐる。

この虚を衝いて赤化の魔手が人民戦線の形態を以て自由主義、民主主義を利用して之と協力提携せんとするに及んで、その危険性は愈々擴大され普遍化されるに至るのである。従つて國內防共の完璧を期する爲には、從來の如く單に共產主義を目標として之に對するのみではなく、苟も國體の本義に相容れざるものは勿論、

國體に對する國民の確信に疑惑を抱かしめるやうなもの、乃至國體明徴の實踐的動向に反逆するやうなもの等を、廣範圍に國內防共の對象と爲すの必要に迫られてゐるのである。

かくて人民戦線の形態による共產主義思想を根本的に剷滅することは、積極的な國體明徴の徹底によつてのみ之を達成することが出来るのである。

防共精神は本來日本精神の一部に内包されるもので、その發現の「表相」であり、皇道實踐化の一顯現でなければならぬ、その意味に於て防共の要は國體の本義より發した積極的自主的なものでなければならぬのである。それは實に詭激、不逞な思想を清掃撲滅するのみならず、進んで肇國の大精神たる八紘一宇の道義的世界觀に立脚せる、普遍妥當なる思想を積極的に發展させて行くことである。而してその爲には、一方に於て八紘一宇の道義的世界觀を學理的に積極的に展開して行くと共に、他方新日本建設の實現の爲に國體明徴、日本精神の具體的見地から政

治、經濟、文化各般に亘り斷乎たる革新的是正改革を斷行せねばならぬ。

又對外的には日獨伊の防共協定に従つて、各締盟國が相互に一層緊密な提携を保ち、更に之を強化擴充して第三國の加盟勸誘其の他防共に関する提携に努むることによつて、コミンテルンの赤化政策及び之と協同して東亞に於ける帝國の地位を脅威せんとする國、更にこれ等の國に依存して抗日の迷路を辿りつゝある中國々民黨政府に對抗し、眞の東洋平和を招來し、眞の世界平和の維持に寄與することが出来るのである。日獨伊防共協定の意義は、日本のかゝる國際的重大時局突破の爲の一大國策に他ならぬ。即ち防共方策は躍進途上にある轉換期日本の最大國策の一でなければならぬのである。

以上の如き對内的及び對外的防共方策を完全に遂行することに依つて、始めて我々は人民戰線的共產主義思想を掃滅し、現下我國の重大時局を突破することが出来るものと信するのである。

印刷番號 第三十二號

(本書の大きは國定規格A5判)